

「BCCWJ を用いた『を通して』と『を通じて』の差異の研究と語彙指導」

ウズベキスタン日本人材開発センター

近藤正憲

キーワード： コーパス、BCCWJ、を通して、を通じて、

1. 研究の背景

「を通して」と「を通じて」の表現の差異は中級学習者を大いに悩ませるテーマの一つである。この二つの表現はともに日本語能力試験の旧 2 級レベル（中級）の文法項目であり、日本語学習の初級を終えた学習者が最初に出会う、理解しにくい差異を持つ表現のペアである。

この二つの表現は「通」という漢字を共有しているうえに、それぞれの読みが音読みと訓読みと対照的であり、なおかつ品詞の上でも自動詞と他動詞という対照を見せていることから、二つの対照的な類似的表現としてしばしば取り上げられてきた。しかし、その外見上の明確な対照性を指摘することは簡単であるが、その用法上の違いを明確に説明することは難しい。

一方で、この二つはきわめて類似しているにもかかわらず、母語話者の感覚からしても、どこかに厳然とした違いのある表現であり、母語話者の日本語教師にとっても二つの差異の説明は頭を悩ませる題材である。

筆者はコーパスを使ってその差異を明らかにすることが出来るのではないかと思い、本研究を思い立った。

2. 先行研究

先行研究としては次の二つがあげられる。①砂川他.(1998).『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版、および②花蘭悟.(2004).『『Nを通して』と『Nを通じて』』『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 30』.17-31. である。両者に共通するものは「を」の前に現れる名詞を経由（あるいは媒介）して、ある動作が行われるというものと、地域や場所、時間を表す名詞を受けてその期間／範囲内全体にある動作が行われ、あるいは現象が起きていることを表すとしている。

以上の二つが先行研究として重要であるが、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を利用した研究はまだされていない。

また先行研究とは言えないものの、インターネット上には、両表現を対照し、説明したものが複数存在する。しかし、そのいずれも根拠に乏しいうえに、母語話者から見て首をかしげたくくなるような説明が行われ、検証も訂正も行われないうえ、公開され続けている。

3. 研究の枠組み

本稿はBCCWJの中納言を利用して両者の用法の違いをコーパスの上で明らかにすることを目的とする。また、この研究を通して得られた両表現の特徴を整理し、日本語指導に生かせる情報を提供する。

3.1 研究課題と仮説

研究課題と仮説については以下のとおりとする。

- 研究課題 1) 両表現の「を」の直前に現れる名詞について、両者の間に性質的な違いがあるか。
- 研究課題 2) 両表現の「て」の後ろに現れる動詞について、両者の間に性質的な違いはあるか。
- 仮説 1 両表現「を」の前に現れる名詞は性質的な違いは存在しない。
- 仮説 2 両表現の「て」の直後に現れる動詞に性質的な違いは存在しない。

以上の二つを検討する。

3.2 使用したデータ

『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』中納言。閲覧およびデータ収集は 2013 年 11 月 14 日に行った。

3.3 研究の方法

上記研究課題 1)については、BCCWJ で「を」の直前に出現する名詞の頻度をそれぞれ調べ、出現する名詞に何らかの傾向があるかどうかを検討した。具体的には、すべてのカテゴリーを対象に、キーの後方共起 1 に語彙素として「を」、後方共起 2 に書字形出現形として「通じ/通し」、後方共起 3 に書字出現形として「て」を入れ、頻度を抽出した。得られたデータから、上位 20 位の単語を分類し、分析した。なお、同位の単語は並立とし、単語が 20 を超えても分析の対象とした。

上記研究課題 2)については、BCCWJ で「て」の直後に出現する動詞の頻度をそれぞれ調べ、出現する動詞に何らかの傾向があるかどうかを検討した。具体的には、すべてのカテゴリーを対象に、キーの前方共起 3 に語彙素として「を」、後方共起 2 に書字形出現形として「通じ/通し」、後方共起 1 に書字出現形として「て」を入れ、頻度を抽出した。得られたデータから、上位 20 位の単語を分類し、分析した。なお、同位の単語は並立とし、単語が 20 を超えても分析の対象とした。

4. 結果と考察

データを抽出した結果、下記のような頻度が検出された。

「～を通して」の直前に名詞が現れる件数	3971 件
「～を通じて」の直前に名詞が現れる件数	4837 件
「～を通して」の直後に動詞が現れる件数	983 件
「～を通じて」の直後に動詞が現れる件数	546 件

また、各研究課題については次のような結果が得られた。

表 2 「を」の直前に現れる名詞の分類（上位約 20 語）

「Nを」の部分	通して		通じて	
	頻度	全体の%	頻度	全体の%
通信伝達媒体	22	2.00%	59	4.96%
組織・機関	23	2.09%	181	15.22%
活動・動作・行為	501	45.55%	354	29.77%
範囲・期間	203	18.45%	550	46.26%
人間・人物	0	0.00%	0	0.00%
具体的事物・肉体(の一部)	351	31.91%	0	0.00%
その他	0	0.00%	45	3.78%
合計	1100		1189	

4.2 「て」の直後に現れる動詞について

表 3 が両表現の直後に現れる動詞の上位 20 位までである。それぞれを分類し、種類ごとに集計したものが表 4 である。

両表現の「て」の直後に現れる動詞の頻度を調べ、その特徴を分析したところ、次のような結果を得た。①「～を通して」の直後には、「もらう」「いただく」「くださる」などの「授受動詞」が現れやすく、②「～を通して」のほうに「いる・ある・できる」が現れやすい。以上は有意水準 0.1% で有意差があった。

また③「～を通じて」の直後には「変化・出現を表わす動詞（変わる）」が現れやすい。以上は有意水準 1% で有意差があった。これに加えて、④「～を通じて」のほうに「活動や動作を表わす動詞」が現れやすい。この点は有意水準 5% で有意差があった。

したがって、研究課題 2) についても仮説 2) は棄却され、質的な違いが存在するという結果になった。

ただし、研究課題 2) の共起頻度と研究課題 1) の頻度とを比べると前者のサンプル数が極端に少ない。その理由は①両表現を受ける動詞は、直後にあるとは限らず、②受ける動詞が名詞化している場合（「～を通じての学習を普及する」のような場合）も多数存在するからである。両表現の差異を研究する上では、この点でまだ課題があり今後の課題である。

表3 「て」の直後に現れる動詞（上位約20語）

「て」の直後の動詞							
～を通してV				～を通じてV			
順位	名詞	頻度	分類	順位	名詞	頻度	分類
1	居る	124	状態	1	行う	77	活動
2	見る	102	知覚	2	得る	30	獲得
3	置く	42	活動	3	見る	25	知覚
4	行う	35	活動	4	知る	23	知覚
5	行く	32	活動	5	知り合う	21	知覚
6	来る	25	活動	6	居る	16	状態
7	学ぶ	23	知覚	7	学ぶ	15	知覚
7	得る	21	獲得	8	流れる	8	活動
7	貰う	21	獲得	8	言う	8	活動
10	伝える	19	知覚	8	遣る	8	活動
10	頂く	19	獲得	11	成す	7	活動
12	知る	17	知覚	12	支払う	6	活動
13	下さる	15	活動	12	分かる	6	知覚
14	遣る	15	活動	12	伝わる	6	知覚
15	呉れる	14	活動	12	出来る	6	状態
16	感ずる	14	知覚	12	変わる	6	出現
17	伝わる	13	知覚	12	送る	6	活動
17	見える	13	知覚	12	考える	6	知覚
17	聞く	12	知覚	19	生み出す	5	活動
17	描く	12	活動	19	聞く	5	知覚
17	考える	11	知覚	19	楽しむ	5	知覚
17	仕舞う	10	活動	19	有る	5	状態
				19	伝える	5	知覚
上記合計		609		上記合計		305	

表4 「て」の直後に現れる動詞（上位約20語）

Vの部分	通して		通じて	
	頻度	全体の%	頻度	全体の%
活動・動作	200	32.84%	125	40.98%
知覚・思考・理解・学習	224	36.78%	117	38.36%
出現・変化	0	0.00%	6	1.97%
獲得・所有	61	10.02%	30	9.84%
状態	124	20.36%	27	8.85%
合計	609		305	
授受動詞	84		8	

5.まとめと示唆

- 「目を通す」「火を通す」「誼を通じる」というのは別個の慣用表現なので、指導の際にはこれを考慮に入れて指導すべきである。またテストの際はこれらの表現を入れるとはっきりとした多肢選択式の問題を作ることができる。
- 上記研究課題 2) については、研究課題 1) で抽出された件数に比べてサンプル数が少ない。その理由は両表現を受ける動詞は必ずしも直後に出現するとは限らないという点に、名詞化した動詞と接続する場合も多いからである。両者を単純に比較することはできず、この点でデータの整理および研究方法の改善が必要である。
- また今回の会議で参加者からいただいた意見としては、両表現の中で本質語としての用法と機能語としての用法の区別の検討を行わなければ、十分な考察にならないという指摘を受けた。この点については次回以降の研究に生かしていきたい。

参考文献：

砂川有里子他.(1998).『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

花蘭悟.(2004).「『N を通して』と『N を通じて』」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 30』. 17-31.

石川慎一郎.(2012).『ベーシックコーパス言語学』ひつじ書房

李在鎬,石川慎一郎,砂川有里子.(2012)『日本語教育のためのコーパス調査入門』くろしお出版